

有森信二



黒雲が足早に山の端をよぎると、背戸の木々がにわかになぎわめき始めた。昼どきには風いでいた北風が、強い潮の匂いとともに戻ってきた。

ヒサの家の背戸のうしろは、十メートルと歩かず、海である。蟹の甲羅に似て低く這いつくばった形の島の、北端に当たるこの家の裏手に出れば、晴れた日には、かすかに朝鮮半島をのぞむことができるのだったが、いったん小さな波でも立つと、半島を見るところか、近くの小島や、本土の福岡への船便は、幾日も欠航となってしまう。

風と波。この気紛れな使者が舞い下りてくると、島人たちは皆一様に寡黙になり、ふしくれたった手でのろのろと投げ網の繕いをしたり、裸電球の下でカマスを編んだり、シュロ縄をなったりする。

北風が一際と激しくなった。

波頭を吹き千切り、うねりを蹴散らして押し寄せてくる風の音は、どこか呼吸器を病む巨大な獣の喘鳴に似ていた。

漆喰の剥がれかけた二階の瓦を、銀杏の古枝がばらんばらんと打つ。十坪ばかりの庭に散り敷いた落葉が一旦巻き上げられ、転がされ、また元の位置に吹き寄せられていく。母屋とは物置一つ隔てた牛屋では、隙間を切る風の音に驚いたのか、母子の二頭が鼻輪を鳴らし、壁を蹴りつけている。

春衛を乗せたライトバンが、自動車一台がやっと通り抜けられるほどに狭い門口から入ってきたのは、背戸の木々がざ

わめき始めていくらも経たない頃だった。枯れ枝の折れる氣配に何度も猪首をすくめながら、ライトバンのハンドルを握っている医師は、昼間でも鬱蒼とした椎や檜のトンネルを、恐る恐るアクセルを踏み、入ってきたのだった。

門口に、ヒサが出ていた。

ヒサは、ライトバンの近づく音を耳にすると、いてもたってもいられなくなつて部屋を飛び出した。昨日よりは今日、今朝よりは昼と、紀子の喘ぎは激しくなつてくるばかりか、吐き氣ののぼつてくる間隔が間を置かなくなつてきた。

医師には、今朝も明け方に往診してもらつてゐる。医師の診たてだと、風邪から気管支と胃腸にきている、ということであつたが、注射も服薬も効き目をみせない。

紀子は、春衛やヒサの呼び掛けにもめつたに反応を示さなくなり、間なしにこみあげてくる吐き氣（吐くものなどなにもないのである）に身悶えし、胸を掻きむしろうとして喘ぐときのほかは、いつも目を閉じている。それに、熱である。四十度を下らなくなつて五日が過ぎた。

「変わりやせんか」

春衛がライトバンから転げ出るなり、訊いた。

ヒサは、折れかかった腰をようようひき伸ばし、蓬髪を風になびかせながら、傍の椎の幹に身をもたせ、立ちつくしている。

「何度診ても、おんなじじゃが」

医師は、雑木の騒ぐ音に猪首を縮ませ、軽く舌を鳴らした。

そして、ライトバンのドアを力まかせに閉めた。

落葉を踏み付けてずかずか歩き、座敷に上がり込むと、医師は紀子の枕元にあぐらをかいた。

紀子は氣配を察してか、微かに首を持ち上げようとする仕草をしたが、閉じたままの目を開こうとはしなかった。目を閉じ、額に大粒の汗を浮かべ、顎を突き出し加減に荒い息を吐いている。黄土色に近い肌には、癖のない髪の毛が幾筋も貼りつき、荒い呼吸とともにせわしなく伸びたり縮んだりする。

「せつかく飲ませたに、全部吐き出してしましますのじゃ、今朝のも昼のも。薬の効く道理もありません」

ヒサは、紀子の額や喉元に吹きこぼれる汗をタオルで拭きながら、枕元の葉の包みの方を顎でしゃくつた。

ヒサのことばに顎髭をひとつ撫でただけで領いた医師は、あばらの浮き出た紀子の胸に聴診器を当て、しばらくその息遣いをはかつていたが、いままでになく注射器をカバンから取り出すと、アンプルを二本切り、いきなり紀子の腕を引き上げ、肩口に突き立てた。そして、診たては今朝となんにも変わらんがなあといいながら、春衛とヒサの顔を交互に覗き込んだ。

その医師の目は、車で片道二十分ほどの距離に過ぎないとはいえ、一日に二回も島の北端まで呼ばれたのはたまらない、といっている。それに、いま一刻を争うというほどの容体でもないではないか、と注射器をカバンに収める手つきも

ぞんざいである。

そういうふうに見えるのは、あるいはヒサの思い過ごしなのかもしれない。

というのは、二度目の往診を無理矢理頼んだ手前、紀子の様子が、春衛があわてて家を飛び出した頃に比べ、わずかではあるが少し落ち着いているのに、ヒサ自身いささか拍子抜けする思いもあつた。勿論、紀子さえ持ち直してくればなにもいうことはないのであるが、医師を呼びに走る前のあの紀子の状態を、つぶさに診て欲しかった。

春衛もヒサも、今度の紀子の状態は、これまで何度となく熱を出したり、肺炎を起こしかけたりしたときとはどこかが違う、と思えてならないのだった。

春衛は、今朝の往診を受けてすぐ、血の色をしたものをまじえて激しい嘔吐を始め、痙攣を二度も三度も繰り返す紀子の様子を見ているうちに、いてもたってもいられなくなつて家を飛び出した。

島では唯一の村立診療所は、窓口が混雑していたため、待合室で通院客の波が途切れるのを昼過ぎまで待ち、何度も頭を下げて二度目の往診を頼んだのである。

「わざわざ出向いてこんでも、電話一本もろうたら用は足せるだよ、爺さん」

医師は、待合室の隅で半日以上も頑張っている春衛に、猪首に食い込んだネクタイを弛めながら、あきれ顔でいった。

「だってな、今朝もイの一番に診たんだよ。まだ夜も明けぬ

うちにな。だのに、あれからいつたい何時間経つた？」看護師がカバンに荷物を詰め込む間も新患が飛び込み、電話が鳴り、医師はその度にネクタイを締めたり弛めたりした。

「吐き気止めも入れとるから、今度は心配いらん。念のため、解熱剤も変えてみた。これで下がらんことはない。だから、爺さん、もう間違うても寝入りばなには叩き起こさんでくれよ」

八畳間に小さな火鉢一つでは手指が縮むほど寒いのに、鼻の下や顎の先にうつつらかいた汗の粒を、医師は手の平で乱暴に拭つた。その手を白衣の裾にこすりつけながら、そのかわり爺さんの熱意に免じてこれから二、三日、朝一番に寄ることにするさ、という。

「そいつは、願つてもねえことです。とにかく、熱が下がる気配がねえ。四十度ちゆうのが、五日も続いとりますで」

「この子の母が、四十度の高熱が二、三日続いただけで、とり返しつかない体になつてしまつたのです。だから、もしやと……」

医師は、猪首を窮屈そうにぐるりと回して煤けた壁に掛けられた写真に目を止め、「今度の風邪は、熱と吐き気じゃ。

この島のかれこれ二割もがみな同じ熱と吐き気でまいつとるが。なあに、誰一人どこにも別状なぞありやあせん。ま、余計な心配するだけ損だ」と太つた体を揺すつて立ち上がり、写真の方に歩み寄ると、「一人娘だった、な？」と片手で眼

鏡をずり上げた。

ヒサは、九年前のあの晩のことは、いまでもはつきり覚えていた。

福岡に住む娘の理恵の、夫の立花から電話が入ったのは、夜の十二時を既にまわっていた。

その晩、春衛が村の会合に出、十時過ぎに戻ってきたのを確かめて床に着いたのだったが、いつもだと枕に触れるか触れないかのうちに寝入ってしまうのに、妙な具合に神経が高ぶってなかなか寝付けないのだった。後から布団に入った春衛が、すぐに軒をかき始めたのとは反対に、ヒサの目はますます冴え、寢屋をおおっている闇の向こうに、もう一つ壁をなして漂う深い闇の流れがあるのを、怪訝な面持ちで眺めていた。

「嫌な色だよ」

ヒサは何度も呟いた。闇の向こうに違った闇があるなどという光景を見たのは初めてであつたし、その黝く漂うものの微かな動きを追っていると、ふっと精が抜かれていくようなたよりなきに陥るのだった。

「齢だから、かね」

ヒサは寝返りをうち、春衛の酒臭い健康そうな軒を確かめると、目をつむり、こんなときは一番楽しいことを考えるに限る、と少しも眠気の訪れてこない頭を振って、紀子のこと

ヒサの頭に、生まれてちょうど八月になる紀子の、頬から顎にかけての甘酸っぱくてやわらかい感触が、ゆつくりと甦ってきた。

紀子は、この家で生まれ、理恵が産褥から出るまでの二か月間、自分が手塩にかけてきた初孫であつたし、一人娘の理恵以来約三十年ぶりに抱く、小さな温もりであつた。ヒサは、恐れとも喜びともつかぬ気持で、夢中で過ごした日々のことを思い、いまままたその小さな温もりのなかにそつと指先を浸していくのだった。

ヒサの思いのうちの紀子は、いつまで経ってもまだ二か月の乳飲み子のままであり、抱き締めれば毀れ散りそうな、薄い皮膜を剥いだばかりの雛である。

ヒサは、二か月が過ぎて、福岡の夫のもとに帰る理恵を送り出すとき、紀子を奪っていく理恵を芯から憎いと思い、まして夫の立花など、出産後三日間付き添っただけなのに、なんの権利があつて紀子と呼べるのか、と叫びたい気持だつた。それほど、ヒサにとつて紀子は自分の血肉にも等しい存在であり、自分がなくては一日として過ごすことのできない、脆弱で愛しい雛であると思っていた。

そんなことは、いまとなつては埒もない思い過ごしてしかないのであるが、ともかくヒサは、理恵に、この新しい命が恵まれたというだけで、十二分奇蹟なのだ、といまさらのよ

小学校にあがったばかりの夏、リウマチを患った理恵は、心臓弁膜症を併発し、それからの学校時代、三分の一は入院や自宅療養を繰り返して過ごした。

商業高校卒業後も、半年ばかりは簡単な家事の手伝いをしてきたが、秋口の風邪で臥せていたある日、思い詰めたような表情で、「このままにもせずついに怯えて過ごすのも、ほんのわずかでいい、思いつきり自由に生きて燃え尽きるのも一緒だわ」といい出し、春衛やヒサが、「その体ではとても無理だ」と止めるのもきかずに、福岡に出たのである。

それが、晩婚ながら三歳年下の立花と結婚もし、医師からわずか十パーセントの危険な賭けだといわれながら妊娠し、たいした支障もなく紀子を生んだのだった。

「とりこし苦労つてあるもんだ」

ヒサは、目をつむつたまま呟き、紀子を理恵に渡すときの自分は、いったいどんな顔をしていたのだったろうか、と思ひみる。自分が二か月の間、いくら精魂を傾けて育てた紀子であるとはいえ、生命を賭してやっと母親になったばかりの理恵に渡したくないとは、どういう心境であったのだろう。

理恵の出産は、母体の方が危険なため、福岡の総合病院に入院することを強く勧められたのであったが、本人が「悔いのない方を選ぶわ」といって、ヒサの元に戻ってきたのだった。それからの、春衛とヒサのうろたえぶりといったらなかつた。腕の確かさでは島で一番の産婆に、いつでも連絡がと

れるようにし、思い付く限りの祈願所にでかけ、札を集め、朝となく夕となく神棚に手を合わせ、春衛は、一日も欠かしたことのない焼酎を三月余りも断った。

それが、出産が思いの外順調だったこともあつてか、生まれた紀子の顔を見た途端、ヒサ自身の頭から理恵のことがずりりと抜け落ちてしまった。

「むごい仕打ちだったんだよねえ……」

そんなヒサの思いをよそに、理恵はアパートでの新しい生活を首尾よく始めていたし、紀子もなんの抵抗もなく立花にも甘えているという。立花は、要領はよくないけれど、世間並み程度には真面目だし、与えられた仕事はまずまずこなすという男である。

「紀子ね、寝返りなんか簡単にできるし、ハイハイだつてもうすぐね。パパも、仕事が済んだら寄り道せずに、真直ぐ帰ってくるの。それから紀子を抱いて、玩具屋にいたり、洋服を見にいたりするのよ。おかげで、居間は玩具だらけ。それに紀子ね、この頃随分はつきり好き嫌いをいうようになって、わたしよりパパの方がお気に入りだし、ウサギのぬいぐるみと寝ても醒めても一緒なの」

理恵は、電話の度に、そんな嬉しそうな溜め息をついてみせる。

ヒサは、電話口の理恵の華やいた声を聞いていると、これまでの三十年近くの間、こんな快活な理恵がある日のことを

想像することができただろうか、と考えるのだった。

とにかく、春衛もヒサも、理恵の就職、結婚、それに出産と、理恵の体のことを盾に、どれひとつとしていい返事をしなかった。

実際理恵は、仕事に就いてからも数度入院をしており、結婚したばかりのときも、疲労からくる発作で短い入院生活を送っている。

そんな理恵が、春衛やヒサの思惑をよそに、自分の力でひとつひとつを運んでいく。春衛もヒサもこれまで数えあげたらきりがないほど、予想を裏切られ続けてきた。それはいうまでもなく悪くない結果の方に、だった。

しかし、とヒサは思う。あの二か月間をともにしたときの紀子だけは、自分のものだと思うのである。ミルク、入浴、お襦袢、夜泣きにと、ヒサはそれぞれそ撫であげるように育ててきた。

いま理恵のもとで立花をパパと呼び、ぬいぐるみを抱いて眠る紀子は、ヒサ自身の紀子ではない。そして、そう思うヒサ自身、性根のねじ曲がった頑迷な年寄りだと恥じるのであるが、たったひとつの秘かなこの「楽しみ」をもつことぐらいい、自分にも許されていいのではないか、と思うのである。

目が冴えわたっていくまに、紀子の色白の肌理細かな頬を撫で、小じんまりした鼻や軟らかい唇をなぞり、また歯の生えていない歯茎を指先で軽くまさぐってやる。すると、少

し不機嫌だった紀子の表情がいく分和み、ヒサの動きにつれて、やがて声をあげて笑いだす……。

なにものかが、闇のなかをよぎった。

最初、ヒサは、紀子の声か、と思った。ちょうどヒサの思いのなかの紀子が、ヒサの膝に抱かれ、体を反らせて笑い転がっていたのだった。

間を入れず、また音が闇を裂いた。

ヒサはあわててとび起き、春衛にすがりつくと、春衛の体を思い切り揺すった。

後になって考えてみると、音を耳にした途端どうして春衛を揺り起こそうとしたのか、そのときにはもう、理恵になにかがあったのだ、とどうして知ったのかわからない。

とにかく闇を裂くベルの音は、理恵の身に変事がもちあがったことを、瞬時にヒサに知らせてくれた。

ヒサは、目を醒まそうとしない春衛を揺するのをやめ、枕元の豆電球をひねって柱時計を見た。十二時はとうに過ぎていた。

電話口までは数歩とかわらない距離であるのに、ヒサの前には、黝々とした淵が横たわっており、淵の上には襟首に凍みるような風が吹きわたっていた。

理恵と紀子が折り重なって倒れているのを見付けたのは、すぐ近所のアパートに住む立花の妹だった。

部屋の明かりは見えているのに、何度電話をしても出ないので不審に思い、管理人室から鍵を借りて部屋を開けてみたのが、十二時に近かったという。

ドアを開けた正面の玄関口に、紀子の足が見え、その紀子に覆い被さる格好で、理恵が倒れていたのだった。

救急車が到着して二人を運び出そうとしているときに、立花が帰ってきた。紀子が生まれてからは、めつたに遅くなることになかった立花であるが、日帰りの長崎への出張が相手方の都合で大幅に予定が狂い、やつとたどり着いたばかりだったという。

理恵の死因は、持病の心臓病ではない、一酸化炭素中毒だった。

理恵は、立花がいつもの時間に帰宅するものと思い、夕食の準備をしながら、いつも一緒に入ることになっている立花と紀子のために風呂にも点火したのだったろう。少し風邪気味の紀子を気遣い、すべての窓を締め切ったままで……

台所と風呂場の火、それにストーブの火。これらが二Kの狭い部屋の空気を奪い去るのに、どれほどの時間を費やしただろうか。不完全燃焼の元とみられる風呂のガス器具は、以前から具合が悪くて、修理を頼んだばかりだったという。

危険を察知した理恵は、紀子を抱きかかえて玄関まで出たところで力尽きた。薄れていく意識のなかで、理恵は、紀子の口を自らの体で覆い、必死で紀子を守ろうとしたのだったに違いない。

食卓には、鍋物と、紀子のための離乳食の準備がほぼ整えられ、きちんと揃えてあったし、俎の上には、二つに割られたレモンが鮮やかな切り口を見せたまま、動きを止めていた。食卓から玄関までの間の板の間には、ウサギのぬいぐるみが落ちており、片時もぬいぐるみを離さないという紀子が、急かす母に抱かれて逃げ出すとき、思わずとり落としたものだったろう。

あのとき春衛とヒサの寝屋を覆っていた、あの時刻の、あの闇の暗さ。そして、闇の奥に漂う、もうひとつの襲をなした黜い淵。あれは、寝屋の隅にまぎれもなく理恵が立ち、春衛に、ヒサに、しきりに今際のことを囁いていたのだ、とヒサは思うのである。

理恵は二十九歳だった。

体に疾患を持つ者にとつて、二十九歳の初産は決して楽だった筈はない。しかし、理恵はわずか十パーセントの賭けに勝ち、紀子を得、それまでは人がいいというだけでともすればふらつきがちだった立花を自分の元にひき戻し、着実にひとつの確かな家庭を築きつつあった。

ヒサは、いまさら悔いてもどうにもならないことであるとわかつてはいても、理恵を心臓の病気以外で失ったことが、たまらなく口惜しくてならない。

しかし、ヒサにはもつと悔やんでも悔やみ切れない思いが

ある。

理恵が六歳の夏、いくらか熱っぽいので学校は休ませたのであったが、台風が接近しているということもあって、葉煙草の収穫に追われていた春衛とヒサは、理恵を一人寝せ、昼食にも戻らず、とつぷり暮れるまで畑にいたのだった。

島の沖に、まがまがしい朱色の雲がたなびき、やがて波頭が尖り始め、腹の底を穿つほどのすさまじい風音が巨大なうねりとともに走るなかを、春衛とヒサは、風と波を背負う格好で畑に這いつくばり、煽られ躍る葉を、一枚、また一枚と、風の手から千切りとつていた。

葉煙草をやつと収穫し終え、泥と汗とヤニにまみれた体を引き摺りながら玄関を開けたときだった。

ヒサの胸元めがけて、いきなり黒いものが飛び込んできた。驚いて身を翻した隙に、黒いものはヒサの腋の下を擦りぬけ、振り返ったときにはもう背戸の雑木の影のなかにまぎれてしまつていた。

「盗人猫め！」
春衛が叫んだ。

ヒサにも覚えがあつた。猫は、留守をねらつてあがり込んで、食卓を荒らし、仏壇にしのび込み、一度はまむしを銜え込んで、生殺しのまま畑裏端に放り出していたことがあつた。

その猫の敏捷なことといったら手のつけようがなく、春衛が何度六尺棒をかついで追いまわしたのか。たとえ、土間

の隅に追い詰めたとしても、六尺棒の一撃などいとも簡単にかいくぐり、障子の破れ目やほんの数センチの戸の隙間から煙のように消えてしまうのだった。

ヒサは、明かりを灯さない部屋の隅で、猫の目が縦に長く金色に見開かれているのに、幾度も出会つたことがある。その目は、ヒサが一定の距離に詰め寄るまでは、瞬きひとつせずじつと息を潜めているのであるが、わずか数センチでも踏み込んだ途端、横つとびに跳ねて、闇に吸われてしまう。それはまさに、闇が動いたことばがびつたりで、ヒサはいまでも、猫は闇から抜け出し、闇に塗り込められるのだ、と信じて疑わない。

「びっくりさせやがつてから」

春衛が背戸を透かし見ながら舌打ちをし、戸口から一步入つたときだった。

ヒサの耳に、誰のものとも知れない微かな呻きがよぎつた。呻きは、老人の空咳のようでもあり、草叢に鳴く地虫の声のようでもあつた。

「理恵！」

ヒサは、一瞬脳天を貫く衝撃に打たれ、地下足袋を脱ぐ間ももどかしく、板敷きに駆け上がった。そして、障子を開け放つと、「明かりを点けておくれ」と春衛に叫び、理恵を闇の底から掬いとりとうとした。

ヒサの指が理恵の肌に触れるのと、春衛が電灯のスイッチ

を入れるのが同時だった。

「理恵？」

春衛もスイッチの紐を引つ張つたまま、立ち尽くしている。

ヒサの指を、理恵の肌が、カツと弾き返した。熱い。人のものとは思えない、燃え盛る炎を掴むほどの熱さである。それに、白目を剥き、唇の端からは涎を流している。

「あなた……」

ヒサは、いま自分の腕のなかで起こっていることを瞬時に知つた。

このときヒサの視線が捉えていたものは、棧の折れて破れた障子でも、埃の積んだ板敷でもなかった。電灯の下に立ち尽くしている春衛の顔も、背戸を揺るがし、家の天井を、柱をきしませ始めた台風のこと、全く頭になかった。

ヒサは、葉煙草のヤニと泥と汗にまみれたまま、歯の根も合わないほどひきつきり顫え、泣き声さえもたてようとしない理恵を、力の限り抱きしめた。

「二十九、だつたです」

「二十九か。惜しいもんだの」

医師は、写真に眼鏡を近付け、しばらくじつと見詰めていたが、突き出た腹をポンとひとつ打つと、「次にもまわらにゃならんて」と猪首を締め、足早に敷居を跨ぎ靴を履きながら、「爺さん、あなたの心配もわかる。だがな、結局はお天道さんが決めることだ。つまり、なるようにしかならんのだよ。」

いいや、医者のおわしが自信がのうてどうのこうのというとるんじやないぞ。わしは、わしなりに精一杯の手を尽くしとるのよ」といった。

そして、背戸の木々の重なりを濃く映した車のドアを開くと、カバンを放り込み、いきなりエンジンを吹かせた。今度、入ってきた背戸のトンネルを、バックで出る。

「そうじゃな、水分を切らさんようにせんといかん」

医師は、運転席の窓からいつぱいに首を突き出し、門口に立つた春衛とヒサに素晴らしい残すと、おもむろにハンドルを操り、車体すれすれのトンネルをゆつくり後退させていった。

車の去っていくトンネルの向こうに小さく見える海は、灰白色に濁り、水平線に垂れる雲をしきりに嘯んで、苛ついている。いつもだと朝鮮半島の見えるあたりには、一際黒い煙の色に似た雲がたちこめ、そこだけが一面に遠く靄っていた。

春衛とヒサは、車が木戸口のカーブを曲がるころまで見届けると、落葉の舞い上がる庭先を歩き、開け放つたままの玄関に戻ってくる。

ヒサは、再び紀子の枕元に座り、氷嚢が少し傾きかけているのを直してやる。春衛は茶筆筒を背に飯台に座り、ポットのおぬるくなつた湯を急須に注ぎ、一息に飲み乾した。

ヒサの胸のうちには、忘れようとしても忘れることのできないわだかまりがある。

理恵のとき、もう半日、いやもう二、三時間早く気付いて

いれば、あれほど理恵を苦しめることにはならなかったかも知れない。そのことを、春衛もヒサもどれだけ悔やみ、何度、理恵の後姿に詫びたことだったか。

あの台風の日、二人は一年分の収穫のことで頭も体もいっぱい、明け方に発熱した理恵を暮れきるまで放つておいた。それも、野良猫の徘徊する部屋に明かりも灯さず、食物だって、枕元に二食分の粥と汁を丼に盛っていたに過ぎない。勿論、理恵は、食物の一粒を口にする気力もなく、四十度の熱に体の芯まで顫え、息も絶え絶えだった。

畑で、春衛にも、ヒサにも、理恵のことが思いの端にのぼらなかつたわけではない。あと一荷、あと一籠と、目前の収穫に追われ、区切りをつけることができなかつたのだ。確かに台風は、時間が経つとともに激しさを増していたし、葉煙草は、台風のほんの余波に巻き込まれただけでも、一夜にして葉は千切られ、揉まれ、よられて、一年の収穫は台無しになってしまう。

一年の収穫と、理恵のこととどちらが大切だったのか、と自分に問う度に、ヒサはことばを失ってしまう。

ヒサはあの日、幾度か春衛に「理恵を見てくる」といい、収穫の方は春衛にまかせて家に戻ろうとした。

春衛は春衛で、「大方目鼻がついたし、後は少々被害ぐらいよしとせにやあ。よっしゃ、この畝で終いじゃな」といいかけ、ずるずると時機を失ってしまったのだ。

「紀子、少しはいいかい」

ヒサは、理恵のことで溢れそうになった思いを振り切るように、紀子の耳の近くで精一杯快活にいった。しかし、喉の奥にツンとしたものが込み上げ、うまく声にならない。

紀子は目を閉じたままでいる。

今朝になって、紀子はときおりハツと虚ろな瞳を見開き、荒い息遣いのまま、ぼんやりあたりを見回したりするようになった。昨日の夕方頃までは、四十度を超す熱に喘ぎながらも、休んでいる学校のことや友達のことをうわごとみたいに喋っていたのだが、昨夜、血の色をしたものを多量に吐いてから、喋る元気もなくなつた。

ヒサには、もうひとつ気掛かりなことがある。紀子は、寝付いてからずっと水状の便を続けていたのが、昨夜から緑色のものに変つた。おまけに、まるで硫酸を流したみたいな腐臭を放つ。

「でも、今日は二度も診てもらつたし、なあと大丈夫。じきに治るに決まつてるさ」

ヒサは、聴診器を当てられ、肩口に注射を受けたままで少しはだけたパジャマの間から新しいタオルをしのばせ、紀子の肌を拭いてやる。紀子の肌は、ヒサのふしくれた指が感じる熱さの割には乾いていて、昨日あたりまで濡れ通るほどだったパジャマもシートも殆ど湿りを帯びていない。

「これじゃ、大時化に違えねえな」

春衛が、ポツリといった。

ヒサは、春衛のいう意味を図りかねた。

「やっぱり：：だな。俺が、こんなこというてはならんが、やっぱり知らせとつた方がええのと違うか」

「知らせるつて、誰に？」

「やつだつて、紀子にとつちゃあ：：」

「あんた！」

ヒサは、いきなり向き直ると、春衛の顔を穴の開くほど見詰めた。

「あんたつて人は：：！」

そう叫んだぎり、ことばにならない。

ヒサは、春衛が狂つたのではないかと思つた。こともあろうに、こんなときに：：。ちょうどヒサが、紀子に理恵の面影を重ねていたとき、春衛はこともあろうに、立花のことを考えていたのである。

立花は、理恵を失つて四十九日も明けないうちに、女を連れてきた。

女とは、理恵と世帯を持つ前からの付き合いだとかで、後になつて気付いたことだが、理恵の通夜にも、葬式にも、初七日にも顔を出し、いつも立花に寄り添っていた。そのあまりのかわいがいしき、馴々しさに、ヒサはてつきり立花の身内の者と思つて疑わなかつたのだつた。

そのとき、女の腹には、もう六か月の子が宿つていた。

立花は、通夜の席でも、齋場でも、際立つてうちひしがれた夫の役を立派に演じた。突然の事故で妻を失い、生まれたばかりの赤ん坊を抱えて途方に暮れている男の悲嘆を、参列者の誰にも印象づけずにはいない好演技だつた。

ヒサは、理恵を亡くした悲しみにじつと浸つている余裕はなかつた。立花の落胆ぶりがあまりにも激しく、それに、一時も手の離せない紀子がいた。

紀子は、理恵に組み敷かれた格好で意識を失つていたが、理恵の体が盾となつて守つたのか、すぐに息を吹きかえした。ヒサは、紀子とともに一か月ばかり理恵のアパートで暮らしたのだが、立花の憔悴が激しいのと、勤務にも支障があるので、しばらく紀子を、立花の実家かヒサのもとかのいづれかで預かつた方がいいということになり、立花が次男であるため、結局子供のいないヒサたちが預かることになつたのだつた。

紀子を博多港まで送りにきた立花は、拝まんばかりにヒサに礼をいい、紀子のことをくれぐれも頼むと、声を詰まらせながら頭を下げた。そして、金銭のことは決して迷惑をかけないからと、何度も念を押し、船が湾内を出るまで岸壁に立ち尽くしていたのだつた。

それから二週間と経たないうちに、女をアパートに入れて
いる。

最初、なにかの用事で立花に電話を入れたのだつたが、電

話口に出た女は、立花は留守だと告げた。

二度目にかけてときも女が出てやはり留守だといひ、「だつて、こんなところ、気持悪くてたままないでしょ。あの人の、いま新しいアパート探しにいってるとのよ」と、「あの人」というところに不自然なほどに力をいれた。

結局、立花と女は、すぐにアパートをひき払つてしまったため、ヒサたちは半年以上も居所がつかめなかつた。立花の会社に訊いても、殆どが勤務中ということでそつげなくあしらわれ、元のアパートの住人に尋ねても、誰も行先を知らないのであつた。

新しいアパートは、二人の結婚式にも出た理恵のかつての同僚が、偶然夜の街で立花と出会つたことでわかつた。

元同僚の話では、立花には、既に、女との間に生まれた男の子があり、引越し早々自動車事故を起こし、会社を一か月ほど休んでいたということもあつて、暮らしぶりはよくなさそうだと、ということだつた。春衛もヒサも、立花の援助など最初から当てにしていなかつたので、こちらはなんとか諦めはついたものの、別れたきりひとことの連絡も、弁解もないことが不満だつた。

立花は、三歳年上の理恵のところにかつての間にか転がり込んできたという心もとない男であつたが、紀子へは一応人並み以上の情を注いでくれるし、生活ぶりも思いのほか真面目であるということ、春衛もヒサも日が経つにつれ、実家からなにかにつけ疎遠に扱われている立花に、むしろ好意的に

接するようになっていた。それが、理恵の知らないところで（とヒサは思うのだが）女と関係を続け、紀子とあまり生まれ月の変わらない子供までもうけている。

そのことを知つたとき、ヒサは、なにも知らなかつた筈の理恵が不憫というより、生まれたばかりの紀子までが愚弄されていたようで、煮えたぎつてくる怒りを押さえることができなかつた。

この九年のうち、立花はどう気が変わったのか、二、三度紀子に会いたいという連絡をしてきた。

女のもとに去つたとはいへ、子供の誕生日までは忘れないものであるらしく、一度は、新入学間際の紀子の誕生日に島に渡る、という手紙をよこしてきた。

絶対会わせないと、という返事を書いてヒサは、こういう一方的で理不尽な手紙に返事まで書かされる自分が自分ながら情けなく、投函を日伸ばしにしていると、「三日ばかり休みをとろうと思うが、会わせてもらえるだろうか」という、電話が入つた。ヒサは、どういうことがあつても会いたい、というのではなく、会わせてくれるのなら三日間の休みをとる、という相変わらず煮え切らない立花につい激し、「紀子には、父親はおらん。そんなこと、誰にいわれんでもわかつとるやろ」と、吐き捨てた。

立花からは、すぐそのあと、紀子の入学祝いのつもりであろう最上質のランドセルが届いたが、ヒサは、紀子の目に触

れさせることなく、送り返してしまった。

最近では、一年前の秋、部下を五人ほど抱える地位につき、暮らしもなんとか楽になり、女も認めてくれたので、紀子を引き取りたい、といつてきた。ヒサは、勿論躊躇なく突っぱねた。

いまさらどういふ顔で、それも、なんとという資格があつて紀子を引き取るなどといえるのだ、とヒサは腸が煮えたぎり、自分で自分の服の袖を噛み千切りたい思ひだつた。

春衛は、ランドセルのときも、一年前の秋にも、一言も喋らず、ヒサのするままにまかせていたが、ヒサには、春衛にも異存のあろう筈はないと思つていた。かむ

「知らせるつて、立花に？」

ヒサの押し殺してはいるが、急ぎ込んだことばに、春衛は、いく分うなだれた首を微かに振つた。

「なんで、いま、急に。それも、あいつなんかには……」

ヒサは、春衛の心のうちまで覗き込む勢いで、声を荒げた。立花には、理恵も自分たちも騙され、利用し尽くされ、いよいよにあしらわれてきたのではなかつたか。

「こいつはちよつとした俺の勘やけど、今度の紀子は、これまでとは違うぞ。あの医者のおりだつたら、たいしたことないんやろけど、俺にはどうもいまひとつつきりせん。といつて、どこがどうとはうまくいへんけどな」

春衛は、出の悪い急須の湯を茶碗に注ぎながら、こめかみ

をひくつかせる。

「そんなこと、わかつてる。だからいうて知らせるなんぞ、筋違いもはなはだしいよ」

二人のことばのやりとりで応えるように、突然、紀子が低く呻いた。春衛とヒサは、あわてて声を落とし、紀子の顔を覗き込んだ。紀子は、目を醒ましたふうではなかつた。春衛もヒサも、ふつと肩で溜め息をついた。

眠り続けているとはいえ、紀子に「立花」ということばを聞かせるのは、憚られた。紀子には、背戸の裏の墓地にある御影石の理恵だけが親だと知らせてある。

「ただな、こんなとこにいたら、救かるものも救からんのじゃないかとな。そう思うただけで、他意はないのよ。かといつて、俺たちにや、全く本土に足がかりはなし……」

春衛は、気まずそうに首をすぼめ、白髪まじりの頭をしきりに搔いた。

ヒサは、脂汗を浮かべ、小さな胸骨をせわしなく上下させて喘いでいる紀子を見詰めながら、「そんな情けないこと、聞きたくもないし、誰にもいわせやしない。ねえ、紀子だつて母ちゃんのところを離れたいなんて、これっぽっちも思いやしないよね」と、自分にもなく、春衛にもなく呟きながら、自分のことばの震えをとめることができなかつた。

日が落ちて、紀子の様子はよくなる気配がなかつた。それまで、呼べば微かに応えていたのが、眉根を寄せたままで、

首を振ろうともしなくなつた。

医師の注射も投薬も、まるで効き目をみせない。しばらく落ち着いていた吐き気がまた戻り、それが紀子の眠りをひっきりなしに破つては、小さな体から、精気を容赦なく削ぎ落としていく。

嘔み締めた歯の隙間からやつと押し込んだ薬は、血の色をした吐瀉物と一緒にどしてしまふのであるから、熱も下痢も喘鳴も治まる筈がない。熱は、体温計を腋にはさんだと思つたら、瞬く間に四十度を超えてしまふ。

ヒサは、四十度を超える熱が、こう五日も六日も続いて、大丈夫なのかと気が気ではない。それに、吐き気である。高熱を発するまでは、重湯や林檎の汁などを少量ずつではあるがうけつけていたのが、この五日というものの、胃にはなにも入っていない。

それでも、よく吐くものがある、とヒサは感心する。吐き気がつくと、体中が裏返しになりそうな音をたて、突きあげてくるものを懸命に押し出そうと、形相を変えて枕やシーツを嘔むのであるが、出てくるものは殆どなく、ただ閉じたまなじりから涙が溢れこぼれるばかりである。

ヒサは、輸液など、吐瀉のもとになるものが体内に残されているうちは、まだいいとして、それらがなくなつたときは、本当に血潮でも吐き出しかねない、と思つてしまふ。そして、その危機は、もう既に、次の回にでも準備されているのではないか、と激しい吐き気がやつと落ち着いたとき、決まつて

間近にやつてくるだろう、次の闘いを思うのだつた。

下痢も、輸液が下るのか、食物を全然摂らないくせに、いつの間にか下着を濡らしている。その硫黄を思わせる臭いが、輸液の内容物によるものか、熱や嘔吐を催させるものと関連しているものなのか、医師に訊いても、答えは返つてこなかつた。

翌朝、医師は、昼をいくらか回つた頃にやつてきた。

「なにしろ、開院の三時間も前から患者が受付のドアの吹きさらしのところで、列をつくつて並ぶ。それを、むやみに放つてもおかれんじやろ。玄関を開け、ストーブをいれてな、顔を洗う間もなく診て、やつとこの時間よ。昼飯をかつ込むと、裏口から逃げて出たんじや。午後の順番待ちが、まだ二十人はおつた」

医師は、朝一番を約束していた手前もあつて、言い訳がましいことをひとしきりいい、昨日と同じ太い注射を一本と、小さいのを一本して、それで終りだつた。

ヒサが、熱の下がる兆しがないこと、吐き気に体力を絞りとられていること、下痢便が異様な臭いを放つこと、それに呼び掛けても応えないことを、くどいほど説明しても、猪首をぐるりと回し、「わかつとる、わかつとるよ、婆さん。しかしな、いま、この島中がみんな同じ症状だ。これはな、今年の風邪の特徴だ。やかましいこといわんと、いまが一番の山と思うて、あとちよつと辛抱するさ」と、急いで立ち上

がる気配である。

春衛とヒサが門口まで送ると、明日はちゃんとするからな、というなりエンジンを始動させ、背戸のトンネルを巧みに抜け、結局五分足らずで帰ってしまった。

「こんなとこまで、きてくれるだけで有り難いと思わなくっちゃな。なにしろ、この島には、医者はずっと一人しかいないのに、往診までしてくれるのだからな」

春衛は、そういう口の端から、「紀子にとっちゃあ、いまさら、逃げたの逃げられたのなどいつてる場合じゃないのかもしれない」と、ことばを濁してしまふ。

「まだ、あいつに未練あるの？」

ヒサが突っ掛かると、「理恵のことを考えとつた。紀子に、理恵の二の舞をさせることだけは、できんぞ」と、春衛は、風に舞い上がって落ちた枯葉を、苛立たしそうに踏みつけた。春衛は、紀子を島の外の医者に診せるより外に手はないという。場合によっては、立花に頭を下げることだって、仕方がないではないか、と枯葉を踏みにじり、一人唸りながら後は口ごもってしまう。

しかし、この強風では、船が出航する筈はない。昨夜、春衛は寝付けないまま、もし明日の朝になって時化が治まっていたら、迷わずに、紀子を背中に結わえつけ、島を出ようと考えたという。

ところが、朝になっても、風は止まなかった。これまでの経験からみて、止む筈もなかった。むしろ、いよいよ吹き募

りだしたといつてよい。それは、一晚中背戸の木々を根こそぎ揉み続け、牛屋の二頭を眠らせず、天井から夥しい煤の灰を降らせて荒れたのだった。

春衛は、念のため、日上がるのを待たずに船会社に電話を入れたのだが、昨日の朝の便から欠航していて、当分出航のめどはたたない、という返事だったという。

「せめて二日、いや一日早くその気になつていたらな。結局、俺たちにはなにもかもついたらんよ」

春衛は、寝不足のためか、青くむくんだ顔をしょぼつかせ、背中を丸めて足を引き摺りながらヒサの前を歩く。

「あんた、紀子はまだどうなるとも決まっちゃいないんだからね。そんな弱音を吐いてたんじゃ、ただじゃ済まないよ。わたしはね、どんなことがあつても、絶対、この手であの子を治してみせる」

「そこだよ。でもな、たとえ熱や吐き気が引いたとしても、理恵みたいにならんとは限らん。紀子を見ると、あのときの理恵にそっくりじゃ。あるいは、理恵が熱だけだったのに比べ、吐き気や下痢までついとる分、紀子の方がたちが悪いのかもしれない」

春衛は、飯台の前に膝をたてると、首のあたりを何度も揉み、充血した目を親指と人差し指の先でしきりに弾いた。

ヒサだつて、この五日ばかりか、紀子が全身に粟粒を浮きたたせて学校を早引けして帰ってきた一週間前から、殆ど眠

つていない。紀子の状態が、理恵のときよりよくないのではないかということは、春衛にいわれるより先に、とうから氣付いている。

そう氣付きながら、二人は互いに口に出そうとしなかった、という方が当たっている。それを口にするので、手中のすべてを失ってしまうのではないか、という不安をなんとか一日伸ばしにしようとしていたのだっただろうか。

「紀子、具合はどうだい」

ヒサは、応える筈がないと知りながら、呼び掛ける。呼び掛けたあとで、紀子を囲んで手をこまねいているだけの自分たちは、紀子にとっていつたいなんなのだろう、としんから思う。

春衛のいうとおり、この島には、万一のときに安心して託せる医師がいなのは確かである。

そのことは、理恵のとき、半狂乱の態のヒサが繰り返し繰り返し、春衛にいい募ったことである。あれから三十年経つたいま、なにも、どこも変わっていない。

飯台に頬杖をつけて目を閉じている春衛の頭にながあるか、ヒサは大体察しがつく。春衛は、時化の海に小舟でのり出し、背中に紀子を結わえつけ、高波の間に見え隠れするはるかに遠い本土の山影を、必死で追っている。

「悔やんでも、どうもこうもなりやしない。こうなったら、腰を据えて、やれるだけやってみようよ」

額に、頬に乱れかかる脂気のない髪を掻きあげながら、ヒ

サは、救かるも救からないもこれは紀子自身もつて生まれ運だから、既に六十の半ばを超えた自分たちは、紀子のもつているものに従っていきさえすれば、どんなぶざまな目に会おうと、それはそれでいいではないか、と腹を据える。

「わかった。が、しかし、俺はまだふんぎりがつかん。一日、一日、ただ手をこまねいて待つているだけだし：：それだけいいのかとな。あてはなくとも、打てるだけの手は打ってみるぞ」

ヒサは、春衛が知り合いの漁師を訪ねて、とにかく博多まで渡してくれないか、と今朝から頼み歩いてきたのを知っている。漁師たちは、こんな時化の玄海灘に漕ぎ出した日には、湾も出ないうちに海の藻屑さ、と誰一人首を振らない。それもその筈で、海上は台風並みの二十メートル以上の風に、その返しの突風が吹き荒れ、数メートルの波が鉛色の空を噛んでいる。

本土まで行けば、本土に行きさえすればなんとかなる。春衛は、そういういながら、漁師たちの一人、一人に、頭を下げてきたに違いない。ヒサは、夜通し枕から首をもたげては吹き募る風の音に耳を傾け、夜が明ける前に床を抜けていった春衛の後ろ姿を、じっと見送った。そして、どこかふらつくような足取りで戻ってきた春衛を、黙って迎えたのである。

紀子が、突然目を開いた。

医師が帰って、一時間ばかりが経った頃だったろうか。

ヒサは、筆筭に丸まった背中をもたせかけたまま、いかにか紀子の呼吸が間遠くなつた感じなのを、気のせいかと眺めていた。

飯台に頬杖を突いていた春衛が、膝をいぎつたまま飛んできた。

「紀子、紀子……紀子？」

「わかるか？ 紀子？」

春衛とヒサの呼び掛けに、紀子は口を微かに開き、なにかを訴えるように喉を鳴らしたが、ことばにはならなかつた。

「紀子、ちゃんと手当してるから、きつとじきによくなる」

ヒサが素晴らしい、伸ばしかけてきた紀子の痩せた腕をとつたときには、紀子はもうだらりと腕を投げだすのである。喘ぎのなかでうつすらと開いた目は、ヒクヒクと小さく痙攣しており、白い濁りが薄い膜をつくっている。

「あんた！」

ヒサは、春衛に向かって叫んだ。

春衛が、投げだした紀子の腕をとつた。腕は、ほんの一週間の間に骨と筋に痩せ、春衛のつかんだ手首から下がパジャマをすべらせて、力なくたわんでいる。青い血管が白い肌を押し上げ、何本も走っている。氷囊の下の額から頬にかけては、ぼつと上気したみたいな明るい色をしているが、それがかえって不安をかきたてる。呼吸は途絶えがちに速く、体中が焼けた鉄板を思わせる。

「ヒサ、こいつはひよつとすると、ひよつとするかもしれ

ん」

春衛は、低く唸り、腕組みをして黙り込んだ。伸び放題の顎髭の先に、糸崩がからみついており、それが春衛の唇の動きにつれて、上がったたり、震えたりする。

受話器をとると春衛は、医師のもとのダイヤルを回した。

一回、二回と話し中で、三回目に通じた。春衛は、相手口に医師がでてくるのもどかし気に、電話のコードを丸めたりしごいたりしていたが、十分以上も待たされるのに業を煮やしたのか、自分の頭を拳でガンガン殴りつけ始めた。

「頼みます、そこをなんとか。とり返しのつかぬことになりそうで……えつ、時間がない？ いえ、いつになつても待つとります。……駄目ですか、今日は、どうしても……」

春衛は、荒々しく受話器を投げた。

こめかみに青筋をたて、膝に両手を打ちつけた。「畜生！」、と受話器に向かって叫んだ。白髪のを掻きむしりながら、「いま、あんたのところから戻ったばかりだ、といいやがる。やり方はあれでええ、何回診ても結果は同じだ、だど。こんなに頭下げて頼んどるのに、聞く耳など持ちやせん」とわめき、よしつ、あいつなんぞに金輪際頼むものか、と立ちあがった。その足で、土間の草履を突っかけると、外に飛び出していった。

紀子の様子が違う。呼吸は速く、喉が音をたてて鳴り、切

な氣にその喉のあたりから胸元にかけて、伸びた爪を掻き立てる。

唇からは低い呻きを発するだけで、ことばにならない。呼びかけても、応えない。眉根を寄せて目をつむり、せわしく胸を波だたせる。

ヒサは、紀子の小さな手をとり、ふしくれた自分の手を重ね、じつと撫でてやる。そして、汗の浮きでた額を、タオルで、指先で、何度も拭ってやる。

ヒサの耳に、激しく風を切る御幣の音が遠くから聞こえてきた。

乞食行者のスエノが、幽鬼の形相で激しく鈴を鳴らし、鋭い気合いとともに大御幣をうち振っている。

スエノの全身からは、線香の匂いにまじって、醜えた体臭があたりに強烈に流れていった。スエノは、顔中に刻まれた無数の皺をひと際濃く深くひき絞り、落ち窪んだ眼窩の底に鉛色の光を漲らせて、宙を舞った。

御幣に払われる空気の下には、春衛とヒサが頭を垂れていて、二人の間には、紀子が横たわっていた。二日前、春衛が、藁にでもすがるつもりで、隣村の行所からスエノを小半日がかりで、おぶってきたのだった。

ハッ、という気合いで動きをやめたスエノは、齒のない口元から泡を流し、もぐもぐとなにごとかを反芻していたが、「心当たりがある。首を半分引き千切られ、そのまま生き

埋めにされたものの霊が、泣いておる」という。

ヒサにも春衛にも、心当たりのある筈もなかったが、指図どおりに神棚と便所に米粉で練った餅を置き、塩と水を供えて、朝昼晩のつとめを続けたのだった……。

ふつ、とヒサは、息を吐いた。あのときのことを思うと、胸がはり裂けそうになる。それは、六十数年のこれまでで、一番鮮明な刻印としてヒサのうちに刻み込まれている。

生き埋めにされたものの霊、首を半分……：あのスエノのことばを、ほんのいま、また間近に聞いたようで、あたりを振り返り、ひとり呟いていると、ヒサは、それはひよつとしたら、理恵のことではないのか、と思うのである。

すると、首を半分引き千切り、生き埋めにしたのは、まぎれもなく自分たちである、ということになってしまう。

そうかもしれない、と思う。

一年の収穫に執着したばかりに、理恵をとりかえしのつかない体にしてしまった。そればかりか、高校を卒業した後は、無理矢理手元に引きとめようとし、福岡に一人出るといいたしたときは、ここにいれば食べるにこと欠くことはないという強硬に反対した。結婚のときは、よく考えてからにした方がいいと、電話の度に理恵を焦らした。

春衛とヒサがしたことは、理恵が翔び発ち始めようとするとき、一枚、また一枚と、羽毛を抜き去っていくばかりではなかったのだろうか。

それは、紀子の場合にも、同じであるのかもしれない。立花の元から、しばらくということまで預かってきたものを、いくら立花が調子のよければかりの男だからといって、引き取りたいというときには、頑なに拒み、結局、本土から遠く隔たった、こんな狭い島の内に閉じ込めてしまう結果になった。

風がまた、にわかには勢いを増し、背戸の木々をゴウと揺さぶり始めた。家の柱や天井もビシッ、ビシッと捻れる音をたて、屋根の瓦が銀杏の古枝に激しく打たれている。

隙間風が容赦なく躍り込み、火鉢の灰を吹き散らし、ヒサの体表からわずかな温もりを奪い去っていく。煤けた壁の理恵の写真も、小刻みに震えて鳴る。

紀子の上気した顔に、苦悶ともいえるひきつれが現われ始めて、どれほどの時間になるだろう。それまで、吐き気ときき以外はずっと眠り続けたままで、不規則な喘ぎや呻きをもらしていたのが、微かな悲鳴に変わった。体内には、水分らしいものは殆ど残っていない筈であるのに、再び夥しい汗が、額から頬から襟首から、ほと走り出る。

ヒサの胸が高鳴りだした。目の前にうつすらとした紗でも下げられたみたいに、紀子が遠く、小さく、臍に霞んでいく。

紀子の手をとると、脈は数えようもないほど速く、まるで焼け火箸を掴むようで、それが絶え間なく小さく震えている。唇には幾筋ものひび割れができ、開かれたまま閉じようとしなない。目蓋は大きく見開かれたり、閉じられたりするが、開

かれた瞳にはヒサの姿は映らない。

ヒサは、隙間風を自分の背中ですえぎり、パジャマのボタンを外し、タオルで届く範囲の汗を拭き、手早く布団を戻してやる。そして、紀子の耳元に「どんなことがあると、この婆がきつと守ってやるからな」と、紀子に、自分に、念仏のように囁きかける。

ヒサの目には、紀子の状態がただ事ではないことは、はっきり見えている。激しい吐き気に異臭を放つ下痢、それに四十度の熱を発して五日目。その熱は、一時も下がる気配を見せず、紀子を闇の中に包んだまま、奥へ奥へと引き摺り込んでいく。ヒサは、たとえ万一、いまずぐに熱が引き、嘔吐も下痢も治まったとしても、元の紀子に戻ることはありえないのではないかと、妙な確信さえ抱き始めている。

ヒサにはわかるのである。

心臓に疾患を残した理恵のときでさえ、これほど熱は続かなかつた。それに、理恵には嘔吐も下痢もなかつた。

「ごめんよ、紀子。こんなところに連れてきたばつかりに。これも、全部、お前の母ちゃんに辛く当たってきた報いなのかねえ」

ヒサは、呼んでも応えない紀子の顔を頬をゆつくり撫で、細れるだけ細った指を一本一本まさぐりながら、胸のうちで頭を垂れる。

紀子は、鼻屑目にはなく十分利発で、自分たちをいつも

明るくさせてくれた。理恵にそっくりの二重目蓋をもち、花柄のスカートに白いシャツがよく似合う子だった。

紀子のお気に入りの花柄のスカートは、枕元に畳んで置かれたまま、一週間の眠りを紀子と一緒に眠っている。

ヒサは、立ちあがり、ゆつくりと理恵の写真に歩み寄った。写真は、福岡に出て就職したばかりの頃のを伸ばしてもらい、以前から掛けているもので、いくら緊張気味ではあるが、理恵の柔和で、しかも芯の強そうなところがよくでている。おまけに、二重目蓋の形といい、頬から顎にかけての線といい、驚くほど紀子に似ている。

「ご覧のとおりだよ」

ヒサは、初めて見るもののように、写真をまじまじと見詰めた。そして、「恨んでいるだろうね」と、手を合わせた。

壁を伝い、ヒサは、写真からいくらも離れていない仏壇に歩いた。仏壇の理恵にも、手を合わせなければならないと思つたのだった。

そのヒサの手が、仏壇の戸を開こうとしたときである。目の前を、いきなり動いた。一瞬、闇が動いたのかと思つた。

仏壇の戸をけたててとび出してきたのは、猫だった。猫が、仏壇の中に潜んでいて、ヒサの胸元を擦り抜け、すばやく逃げ去つたのだった。

ヒサの脳裏に、闇の底で震えていたあの日の理恵のことが、まざまざと甦ってきた。それは、鋭い刃物で刺し貫かれるよ

うな激しい痛みと、動く重くのしかかる澱のような不安とで、ヒサの胸を襲ってきた。

春衛が風を全身に受け、戻ってきた。手を泥だらけにし、鼻の頭も耳も指も、寒風に凍えて、赤く染まっている。

「見付けたぞ」

春衛は、くしゃみを連発しながら、「いらぬときや、そこから中うじゃうじゃしとるくせに、探すとなると、とんとおらん」と叫び、こうなつたら最後の手じゃ、と土間に鹽や水を運んでなにやら始めた。

「なにをするの」

「蚯蚓さ」

「蚯蚓？」

春衛は、糸蚯蚓を裏の畑で掘っていたのである。「あの医者に断られたとき、熱冷ましに効くと、村の年寄りから昔聞いたのを、ひよいと思いだしてな」と、蚯蚓を鹽の中で丹念に洗っている。

「摺り鉢を用意してくれ」

春衛は、何度も水をくぐらせた蚯蚓を、手の平に伸ばして待つている。

ヒサが、台所から摺り鉢を抱えていくと、春衛は、「こんな気色の悪いもん飲ませるからいうて、変に思うなよ。このままじゃ、紀子は間違いなく土に戻っちゃう。もう待たなしゃ。そんなら一か八かやつてみるさ。蚯蚓は霜柱の下の

土の中で、それこそカチカチに冷えきっていたんだからな」といい、完全に水菜状になるまで擦り潰す。

「できたら、オブラートか紫蘇の葉にでも包んでやりたいのだがな」

摺り鉢の底に溜まった薄茶色のものを、春衛はスプーンに掬いとると、自分の鼻先で臭いを嗅いでみてから、ヒサに紀子の upper body を少し起こすように命じた。ヒサは、スプーンに掬われたどろりとしたものを見ただけで、胸が悪くなりそうになったのだが、紀子の状態が差し迫っているいま、抗つてい

る暇はない。
ヒサは、目を閉じたままの紀子の肩の下に腕を入れ、グラグラたよりない頭を自分の胸で受けて、まるで自分が生臭いスプーンの液体を飲まされる本人でもあるかのように、身を硬くして待った。

春衛は、うつすら開いた紀子のひび割れた唇の隙間にスプーンをこじ入れ、きつく食い縛った歯も無理矢理開かせて、液体を一気に喉に流し込んだ。

「俺たちがいまでできることといったら、こんなしょうもないことだ」

スプーンも摺り鉢も放ったまま、春衛は、紀子から離れると、飯台にもたれ、呆けたみたいな、泣きだしそうな目をして伸び放題の顎髭をまさぐっている。

ヒサの胸からは、いつまでも動悸が去らなかつた。理恵に

続いて、九歳の紀子までも失つてしまわねばならないとは、いったいなんという皮肉なのだろう。そう考えると、六十路までの齢を拾い生きてきた自分が、うらめしくてならない。もし、代われるものならば、理恵にも、紀子にも、この齡のすべてをなげうつてでも、与えてやりたかつた。

紀子に対し、自分たちができることといえは、もう「そのとき」を黙って待つことしかないのだつた。おまけに、いくら打つ手がないとはいえ、地面を這いまわる蚯蚓を飲ませるなど、これほどの酷い仕打ちをすることになるとは考えもしないことであつた。

八畳間に躍り込む隙間風は、いつまでも止まなかつた。風の冷たさは、部屋中の暖気を奪い去り、黙りこくつたままの春衛とヒサの上を、容赦なく駆け抜けていった。

海鳴りが、すぐ間近で歯軋りに似た音をたてた。その腹の底に響く唸りが、八畳の間にまで手にとるほどに聞こえる。風の向きが、いくらか変わったのかもしれない。背戸の裏手のわずか十メートルの距離など、嵐のなかではまるでないに等しい。

春衛もヒサも、この海の荒れる様を、数十年というもの、目のあたりに見、体で聞き覚えてきた。

台風の日には、海一面がのたくり、島全体を一飲みにするのではないかという形相で、ヒサたちの小さな家をゆうに越える高い壁を幾重にもつくり、飛沫をけたて、沖合から攻め

寄せてきた。

一月、二月の木枯しの季節、海は水の色を見せることなく、苦りきった空の色と一体となつて、幾日も幾日も、不平の笛を鳴らすのだった。

そんな日のことを、春衛もヒサも、数えきれないほど知っている。そして、そんな海の脅威でさえ、じつと頭を垂れ、息をひそめていれば、いつの間にかひとりでに過ぎていくものだと思つていた。

この、まるで鳥の糞を落としたほどの、狭くて平べつたい島。本土に渡るには、およそ十二時間を要する、地図の上では名前だけしか示されない、一点の島。それでいて、自分たちにとつては、他のなにもにも代えることのできない大地である島。

ヒサには、長年慣れ親しんできた筈のこの島のすべてが、いま、自らのどこかで、ことごとく忌まわしいもの思えてならなくなりつつあるのを、ぼんやり眺めているのだった。

いったい、どれだけの時間が経つたのだったろう。

激しく続いていた紀子の呻きが、ふと途切れた気配にハツと我に返つたヒサは、一種の暗い直感に全身を貫かれ、反射的に紀子の額に手を当てた。

とうとう、このときがやってきた。

そう、ヒサは観念した。観念して、瞑目した。

つい数時間前まで、氷囊の下でさえ、焼け付くようだった

熱が、まるでないのである。ヒサは、額のあまりの冷たさに、あわてて胸を、手を、足をさわつてみた。

：：やっぱりこれで最後なのか。息絶えたための冷却が既に始まりだったのかと。

しかし、そのヒサの指先に、思いがけないほどやわらかい紀子の肌の感触が、一条の稲妻に似たシヨックを呼び起こしたのだった。

「あんた！」

ヒサの絶叫に、驚いて立ちあがつた春衛が飯台をひっくり返し、顔色を蒼白に変えたまま、走り寄つてきた。

(了)